

その場を頑張って乗り切ったので現在の幸福があるのだらうと、感謝する毎日です。

平成元（一九八九）年には主人も他界し、息子の代になり細々ながら商売を続けているが、孫が小学校六年生の時に書いた作文で、「僕は金物店の六代目を継ぎます」というのを読んで嬉しくなり、必ず実現するように祈っている毎日でもあります。

世界のどこかで戦争が続いていることをTVや新聞で知るたびに、何故に殺し合わなければならないのか？ 孫たちの時代にはどうなるのかと考えると、胸が痛んで仕方がないこのごろです。

早く世界中が平和になりますことを祈らずにはおられません。

私と妻の労苦記録

福島県 加藤 清

まえがき

私加藤清も妻芳子（旧姓渡辺）も、共に福島県の貧しい農家の生まれで、それぞれの両親が家族を引き連れ、満州開拓団員として渡満したことから人生が狂い、言うに言われぬ労苦を背負う運命となった。

当時貧しい農家には「満州に行けば土地がたくさんもらえる。こんなに狭い福島 of 山奥にいるより、広い広い大陸に渡って開拓に精を出す方が生きがいがある」という夢があった。もちろん渡満するということは一大決心のいることであったが、反面夢の膨らむことでもあった。だがその結果は、大人たちはもとよりその家族にとっても大変な苦労となろうとは、夢にも思わぬことだった。

開拓が大変な仕事であることは十二分に覚悟をしていたことだが、一生懸命に働けば将来は大地主になり、平和で豊かな生活が送れるという、明るく希望に満ちた毎日でもあった。それがあの敗戦を境に急転直下、環境逆転をしてしまった。

苦難の道をたどったとはいえ、生き残った私たちは全く幸運と言う他はなく、開拓団の大多数の人たちは、望み半ばにしてその人生を終わらせてしまった。

私たち夫婦はそれぞれの苦難な運命を経て、故国日本に帰国してから縁があつて結ばれたが、それまでお互いにそれぞれ違う道をたどつての苦労ではあるが、共通することは戦争というものがいかに悲惨なものであり、憎んでも憎みきれないものであるということである。二度と起こしてはならない戦争、平和ということがいかに大切であるかを、現代の人たち、特に戦争を美化して考えている人たちに、私たちが体験した労苦を少しでも知ってもらい、日本人全体が世界平和のために

努力することを願つて、私と妻とがたどってきた道をまとめたいと思い、忘れかけている記憶を呼び戻しながら書いてみた。だがどうしても書きたくないこともあるので、そこは割愛した。

私たち夫婦は共に福島で生まれ福島から渡満し、そして中国人として生き延び、日本へ帰国してから再び福島の地に戻り、そこで結婚して人生をやり直し現在に至っている。

私たちの子供のころのこの福島の山村は悲しく、辛く、侘びしく、そして寒いという思い出だけだった。今日では、山も畑も肥沃になり、農作物や果実類が豊富に収穫されるようになった。農村の生活も一変し、平和で落ち着いたものとなり、故郷の有り難みをしみじみと感じているが、これも日本が平和であるからで、平和の有り難さはあの戦争による苦しみを体験した者だけが、余計に感じるのだろうか。

現代の若者にとっては「空気と水と平和はただ」だろうが、私たちににとっては「空気と水と平和は、

血と汗と涙であがなったもの」と、声を大にして叫びたい。

一 私の労苦

私、清は昭和八（一九三三）年に、父加藤久一、母サイの長男として福島県片田舎、三和村で生まれた。その時代の農家の子供は「貧乏農家の子沢山」と言われていた通り、長男ではあったが上に姉が四人もいたし、その後には弟が生まれたので結局六人姉弟であった。姉三人は母親違いで、実母は昭和七年に異父姉を一人連れて久一の許に再婚し、そしてその翌年に私が生まれた。

そのころの継父は猫の額ほどの田畑を耕して農作業をしていたが、冬になると遠く働きに行き春になって戻って来るという出稼ぎ農家でもあった。

姉弟は仲良く過ごしていたが、上の姉二人は小学生時代から他の家の子守りなどをして働いていたので、家にいたのはほとんど下の姉二人と私だった。

昭和十六年の秋、父は満州へ行くという佐藤勘

右エ門さんの家を借金をして買い取るつもりで、話し合いに佐藤家を訪れたが、いろいろと開拓団や満州の話聞いてうちに、だんだんと自分もその気になってしまい、ついには意気投合して母にも親戚にも相談することなく、満州行きを決めてしまった。話を決めてから、母や子供たちを集めて父は「満州開拓団に入った。これから満州へ行く。満州へ行けば土地はたくさんもらえるし、働く場所もいっぱいある。こんな狭い三和村で一生を過ごすより、大陸の広い所で伸び伸びと働こう！」と言った。

父はそれまでもいろいろな人から満州開拓団の話聞いていたし、資料も取り寄せて読んでいたので、自分では気持を固めていたようだったが、母にも全く話をしていなかった。有無を言わさぬ父の態度に、結局のところは父の言うまま、母も姉たちも反対することもできず、そのまま父の思い通りに決まってしまった。

昭和十七年の三月に、佐藤さん一家と共に渡満

することになり、わずかばかりの財産を全部処分して、福島を去ることになった。そのころには一番上の姉は他家へ嫁いで子供も一人いたので、結局のところ家族七人で渡満した。

村を出るときの様子を、今でもはっきりと思い出す。村長をはじめ村の主だった人は全員、村外れの峠まで送ってくれたし、小学生の楽隊つきで手に手に日の丸の小旗を持つての見送りで、それは盛大だった。郡山駅から汽車に乗ったが、ホームの片隅で見送っていた長姉の顔は涙でくしゃくしゃになっていた。

船には神戸から乗ったそうだが、大きな船に乗るなどということは、両親も初めてのこと心配だった。案の定船が玄界灘に出ると大時化に遭い、木の葉のごとく左右上下に揺れて大変だったそうで、みんなは船室の畳の上でごろごろと転げ回っていたと、後に姉が話していた。

その大揺れの船に二日間も乗り、やっと大連港に入った。大連からは汽車だったがここでも車内

は満員で、やっと座ることができたが、乗客はほとんど満州人で、口々に「にんにく」を囁んでいて、車内は悪臭が充満し、子供でも気が遠くなるようだった。

汽車は佳木斯に着き、家族はそこで下車した。

翌日迎えのトラックで、目的地の三江省筆架山にある福島県開拓団第二部落へ入った。三和村を発するときはまだ大分暖かくなっていたが、ここでは未だ雪が残っていて、冬並みの厳しい寒さには驚かされた。部屋の中は一応温突もありアンペラも敷いてあったが、子供でありながら寒さで熟睡できず、うとうとすると目が覚める、の繰り返しで、そのうちに頭痛がするようになった。

開拓団での生活は三和村での生活とあまり変わらず、貧しいものだったことを記憶している。開拓団の前地に筆架山という、あまり高くはないが姿の良い公園のような山があったが、登ると見渡す限りの大平原が眺められ、どこが地の果てか分からないくらいで、さすが大陸だと感じ入ったも

のだ。天気の良い時には、果てしない地平の先に、きらきらと光っている所が見え、それが松花江だった。子供たちはみんなこの山に登っては遊んでいた。しかし美しいばかりではなく、その山には恐ろしい動物もたくさん生息していて、特に怖いのは狼だった。

ある夜、隣の家といっても約五十メートル以上も離れていたが、その山田さんが馬に飼い葉を与えているときに、大きな狼が突然襲ってきて腕に咬みつくという災難が起きた。どんなに振りほどこうとしても狼は離れないので、山田さんは狼を抱えたまま我が家の戸を叩いた。何事かと飛び出した父が大鎌で狼を打ちのめしたが、山田さんの傷はしばらく治らなかった。また各部落では火事がよく起こり、せつかく建てた家が全焼するという不幸な出来事があったり、病人も多発して随分と困った様子だったが、団の基礎が確立していないので財政的にも厳しく、生活に困難をしている家を救済することはなかなかできなかった。

「これは何とかしなければならない！」と、正義感の強い父は団長たちといろいろ相談していたが、思うような改善はできず、そのうちに団長も高血圧で入院するという事態になった。しばらくして関東軍で使っていた軍馬の払い下げがあり、一戸に雌雄各一頭ずつ支給されるという朗報があった。これには団員はもとより私たち子供も大変喜び、団内の沈滞した空気も一変し、みんなの気持ちが晴れやかになった。

しかし実際に支給された軍馬は騎兵隊の乗馬で、人間は乗せることができるが、馬車などは引いたことがない馬だったので、部落総出で力を合わせて馬車引きの訓練を始めることになった。

父も団内融和の一役をかって出て、一生懸命になっていた。調教に精を出していた時に、訓練中の我が家の一頭が急に暴れ出したので、それを引き止めようとした父は、その馬に蹴られ肋骨を三本も折り、全身打撲の重傷を負った。開拓団の病院は遠いので、部落の診療所に取りあえず収容さ

れたが、運の悪いときには悪いことが重なるもので、そのときの診療医は眼科医しかおらず、獣医の菅原さんの応急手当でギブスをあてたが、十三日目に呆気なく亡くなってしまった。しっかりと病院に入院させていれば、もっと手厚い手当ができて死ぬようなことはなかっただろうと、悔しくて悔しくて諦め切れぬ思いであった。

日本を離れて遠い満州の地にきて、ただ一人の頼りであった父に先立たれた私たち家族は、これから一体どうすれば良いのかと嘆くばかりで、母は福島へ帰ろうと言ったが、姉たちは全財産を処分して裸一貫でここにきたのだから、今更おめめと帰ることはできないと考えていたし、多くの団員の方からも励ましの言葉を頂いたので、このままここでお世話になることに決めた。

特に山田さん一家には随分と励まして頂いたし、親身にお世話して頂き本当に助けられた。この御恩は何としても帰さなければと今でも思っているが、山田さんは召集されてその後シベリアに抑留

されて亡くなり、奥さんは新京まで一緒に避難したが、産後の肥立ちが悪く亡くなってしまった。残念なことだった。

昭和十九年の春には我が家と一番親しくしていた三和村出身の平尾武雄さんも、肺炎にかかって急死してしまわれたが、二人力の豪傑な方だった。父を亡くして頼れる男性がいなくなった母は、気持ちの上から随分落ち込み、弱気を見せるようになっていた。それを支えたのが一番上の姉だった。姉トシは朝早くから二人の妹に指図して畑仕事や草刈りなどをしていたが、私はまだ幼かったので外で働くことはできず、飼っている牛や山羊の世話を受け持った。

家の蓄えも少なく、満州人の作っているまくわ瓜を買うこともできなかった。姉はそんな弟妹を惨めに思い、母に隠れて非常用に貯めていた米を少しずつ持ち出しては、まくわ瓜と交換して食べさせてくれたが、その美味しさは今でも瓜を見ると思い出す。あの時代の満州人農家では、米など

は食べることができなかつたので、相手も大喜びで交換してくれたと、姉から聞いた。

そのころ筆架山の麓の哈達密河^{ハタミガワ}に、発電用のダムが建設されることになり、団の男性も農作業の合間には働きに行き、現金収入を得ていたが、我が家ではそれができなかった。さらに石炭搬出のため佳木斯市を起点とし、東方へ向かつての鉄道工事も進められており、開拓団の第四部落の北側を抜けて安邦河^{アボウガワ}を渡り、富安炭礦に至る鉄道路線が敷設されていたが、その工事に多数の日本人、満州人が働き景気が上向き始め、団でもこれらを契機にして発展、繁栄を期待して頑張っていた。

しかし実情は悲惨なことが多く、子供心にも不安をもたらししていた。それというのもダム工事、鉄道建設工事も戦局の推移と関連して、一日でも早く完成しなければと言うことから、大部分の労働者は支那事変における中国軍の捕虜だった人たちで、食糧難の中での苛酷な重労働と、それ以上に阿片中毒者が多く、毎日多くの労働者が作業中

に倒れて死亡者が続出していた。大部分の死者は、山の中や野原に放置されたままになっていて悪臭が漂い、開拓団の人たちも現地へ行くことを止められるようになった。いかに戦時中とはいえ、これで良いのかという不安は団内にも充満していて、人は寄ると触るとその話で持ち切りだった。

昭和二十年になると南方戦線の戦局は悪化の一端をたどり、この開拓団でもその影響がじわじわと押し寄せてきた。三月ごろから団員への召集令状が次々ときて団内の男性は少なくなり、五月には老人を除くと一人もいなくなり、女、子供そして老人だけの開拓団になった。必然、農作物の収穫も目に見えて減ったが、団本部からは増産の督励が日増しに強くなっていた。学校でも勉強どころではなく、女性の先生の指導で、子供たちは団内で特に困っている家へ農作業の手伝いに行くようになった。

八月八日までではどんなに戦局が悪くなっているも、開拓団がそれに巻き込まれるということはあ

り得ないと思い、日常生活が根底から覆ることは想像もしていなかったが、日ソ不可侵条約を一方的に破った、ソ連軍が国境のあちこちから戦車を先頭に侵入してきた。国境に近い開拓団は急いで避難することになった。団本部からは「必要最小限の荷物を持って団本部へ集まれ」という指示と共に、「二、三日分の食糧も、各家で準備して携行するように」との連絡もあり、母と姉たちは慌ただしく荷物をまとめ握り飯を作って準備し、私もリュックサックを背負い弟の辰男の手を引いて行くことになった。

避難する時に二番目の姉スミ子は用事があって佳木斯市へ行っていたので心配したが、致し方なく一緒に行動することができなかった。結局家を出たのは母、姉二人、私、そして弟の辰男の五人だった。筆架山開拓団でも団本部から一番遠い所にあった第五部落の人たちは、連絡が届かなかつたのかそれとも出発が遅れたのか、とうとう団本部と合流することができず、その後一切連絡が取

れなくなった。

家で飼っていた雌馬が子馬を産んだばかりだったので、大車を引かせることはとても可哀想なことだったが、他に方法がなく致し方なく引かせることにして、姉二人が手綱を取った。雨上がりのつたので道はぬかるみ難渋で、力のない馬は大きな鼻から白い息を吹き出し、乗っけていてもいつ倒れるかと心配した。途中で轍わだちの跡に車輪を取られ、ひっくり返る馬車もあったが、それを助けることは全くできなかった。

団本部を出発してしばらくすると、団列はしばらくとなつてしまい、みんな我先にと争って走った。団長も奥さんが遅れたので一緒に行動することができず、残して夢中で走った。しかしだんだんと道が悪くなり、とうとう進むことも退くこともできなくなった。そのうち再び雨が降り出したので、せつかく積んできた荷物を一つ一つ投げ捨てて軽くしなければならず、投げ捨てるとそれを待っていたかのごとくに、満州人が押しかけてき

て争って拾い、あたふたと部落の方に逃げて行った。我が飼馬もとうとう力が尽きて動けなくなり、みんなで作るだけの荷物を持って歩く事にし、馬車から馬を放した。馬は急に軽くなったので元氣を取り戻し、「ひひーん！」と一声高く嘶いて元の道へ戻った。みんな涙を流してこれを見送った。あとで聞いた話では、団長夫妻はソ連軍に追いつかれて捕まってしまったとのことだが、別の話では佳木斯で二人で手を引きながら、とぼとぼ歩いていたのを見た、という人もいた。

私たちの一団は、佳木斯に向かって必死になって歩き、腹が減つてくると体に巻き付けて持ってきた握り飯をかじった。家を出るときには私が手を引いていた弟辰男も、だんだんと疲れて歩けなくなり、私がどんなに「頑張れ！」と声を掛けても歩こうとしなくなった。それを見た姉トシが引き返して弟を背負い、私は姉の持っていた荷物を両手に下げて歩き出したが、十二歳にはかなりの重荷だった。

同じ福島開拓団の中に病気で歩けない青年がいて、その父親に背負われていたが「僕はもうだめだから、ここに置いてお父さんは逃げて！」と泣きながら訴えていたので、周りの人も「もう少しだ！頑張つて！」と励ましたが、どうしても嫌だと言つて父親の背から飛び降りてしまったので、致し方なく置いて行くことになった。あとで聞くとその青年はその場所で亡くなっていたので、通った人が道端に埋めてきたとのことだった。また馬車の上でお産をした人もいた。やっと佳木斯駅前に到着したときには、駅前は同じような姿の人たちで埋まっていた。

佳木斯から南下する最後の列車にどうにか乗り込むことができたが、車内はすし詰めの状態で、荷物などはほとんど持ち込めなかった。そのころはまだ関東軍の兵隊も多数いて、軍隊としての規律も維持されていたので、車内でも日本人の女の子供は優先的に扱われていた。隊長らしい人から「開拓団の人たちは無事にハルビンまで送るから安

心するように」という話があった。私たちも筆架山から佳木斯まで苦しかった避難行動から、やっと救われた気持ちになり、精神的にもひと安心ということになったが、途中でソ連軍機に襲われ、そのつど列車は停まり、私たちは車外へ飛び降り、^{くさむら}叢に身を隠し、飛行機が飛び去ると再び急いで列車に乗り込むという行動を繰り返した。そのうち列車は夜間だけ動くようになったので、怖い思いで過ごした。途中、半日以上も叢に潜んでいたこともあったが、腹が減ってきて我慢ができなかった。

やつのことで綏化へ到着し、一時的に郊外の陸軍飛行場の格納庫に収容されたが、そこで戦争が終わったことを聞き、身も心も呆然自失の状態になり、みんなは声を出して泣いたが、そのうち、気を取り直すと「これからどうなるのか?」「日本へ戻ることはできるのか?」と、これからのことが急に頭に浮かんできた。みんなの気持ちの中には「二、三日の避難行動が終わったら、再び筆架

山へ戻る」という希望を持っていたので、それが二度と戻ることはできないと知ると、そのショックは大変なものだった。

その日から本当の苦難の道が始まった。日本軍の武装解除が行われ、兵隊はソ連軍に連行されることになり、私たちはそれを見送るという思わぬ結果になり、そしてすぐにソ連兵と暴民による暴行、略奪、そしてあらゆる迫害が始まった。この恐怖と混乱の中で、赤ん坊、老人、幼児、そして病人などが次々と死んでいくという惨事が起こった。

綏化の収容所では約一カ月間過ごした。北滿の各地から南下して来る日本人避難民は、毎日のようにここの格納庫に収容された。当然食べ物配給も少なくなり、日に日に欠乏してきたので、ソ連軍側もさすがに増え続ける難民をこのままにしておくとができなくなり、しかも冬季に向かい寒気も厳しくなってきたので、一日に数本の列車を運行し、新京・奉天に南下させることになった。

だが計画通りに列車が運行されたわけではなく、山の中に入ると列車は停まり、腕時計などの貴重品を要求し、出さないと動かさないという卑劣な行為を繰り返していた。やつとの思いで私たち福島開拓団の一人は奉天に着き、降ろされてすぐに、難民収容所になっていた市内の春日小学校に収容された。これも、満州各地から送り込まれた避難民で、すし詰めの状態だった。

それまでの疲れから手足を伸ばして横になるとを期待していたが、そんなことは夢のようなことで、座るのが精いっぱいだった。天井も壁も床も至る所に剥がされた跡があつて、寒風が嫌応なしに吹き込み、寒さが厳しかったが、それでも疲れが出ていつの間にか熟睡してしまった。

ここでも監視のソ連兵が押し入ってきて、わずかな荷物を足蹴にしたり、小突いたりして物色していたが、何もないと知ると自動小銃を上に向けて乱射した。

私は寒さと空腹に我慢ができず、母や姉に「腹

減った！何か食べたい」とだだをこねた。食べる物は何もないことは子供心にも分かつてはいたが、それでも言わないと気持ちが悪く落ち着かなかった。そのうち、母は姉トシと一緒に食べ物を探しに出掛け、夕方になるとトウモロコシ高粱などを少量手にして帰ってきた。母はそれを水できれいに洗い炊いて、雑炊にして食べさせてくれたが、私たちはそれを食べるように食べたことを忘れない。母と姉はあちこちの満州人の家へ行っては、僅かな金と引き換えに食べ物を求めたが、そのうちに姉トシがその満州人の家にもらわれて行つた。

当時姉は体が随分と弱つていて、歩くことも困難な様子だったが、それでも私たちのために自分を犠牲にしてもらわれて行つた。それから、ときどき難民収容所に同じような境遇にある友達と連れ立って会いにきて、途中で買ってきた「焼き餃子」を食べさせてくれた。こんなにおいしいものは、今までに食べたことがなかった。

十二月の半ばになると、弟辰男が栄養失調から

足が弱って一人で立つことができなくなり、このままでは死んでしまうと母は思い、満州人の家に預けるために私と三人でその家に行き、辰男を預けた。その際、その家から私も一緒にと言われ、びっくりしてしまった。私はどんなことがあっても絶対に嫌だと言って泣きわめいたので、その話は取り止めになり、母と二人で難民収容所に戻った。

収容所の人たちは毎日のように飢えと寒さで死んでいったが、その死体は学校の水のないプールへ投げ込まれた。上からかける土もないので、死体の上には死体が重なり合っているという状態だった。プールは確か二十五メートルくらいだったが、そこもすぐにいっぱいになった。

年が明けて一月の末には、母も飢えが原因で亡くなってしまい、プールの横に新しく掘った大きな穴に入れられた。手を合わせるだけだった。それしかできることはなかった。下の姉もその前に満州人の家にもらわれていたので、とうとう私一

人で生きていくことになってしまった。だが周囲の人たちが心配してくれて、姉トシに連絡を取ってくれたので、姉が迎えにきて奉天郊外の農家にもらわれていくことになった。私は大分それに抵抗したが、実際問題として、私一人で生きていくことは当然のことながらできるのではなく、泣く泣くその家へ連れて行かれ、姉トシと別れた。

その家での最初の話では、農作業の手伝いをするかわりに学校へ通わせるという約束だったが、そのうちにそんな約束はしていないと言われ、農作業の手伝いばかりで学校へは行けなかった。

数年その家で生活していたが、病身だった養父母が相次いで亡くなったので、再び一人になった私はその家からも追い出され、奉天市内を放浪して歩いた。二人の姉、そして弟の辰男のもらわれた場所も家も知らないで、訪ねることもできなかった。中国語も満足に話せないで、市内を乞食のごとく歩いていると、満州人の子供からは「日本人の鬼っ子！」と、罵られて石を投げられたり、

棒でたたかれたりした。私は、逃げ惑うしかその場から助かる方法はなかった。

こんなことはどんなに言葉を並べても表現できるものではなく、また話したくない。例え話しても書いても、私以外にその事実を本当に理解してくれる人はいない。私の口は全く貝になってしまふ。これからの私の生き様は、私が死ぬまで一切語ることはないと心に固く誓った。あのような困難・混乱、そして屈辱の中で、どうしても生きるのだという固い決心をしたことは、自分自身の誇りとして持っていて、がむしゃらに働き、そしてどんな屈辱や迫害にも耐えて生き抜いた。

月日が流れ、日中の国交が回復した昭和五十年二月、私は同じような境遇にいた人たちと日本へ帰国した。羽田空港に降りると姉トシが迎えてくれた。このことは想像もしていなかったことで、それこそ夢か幻かのようなだった。その後、私は姉トシの家に当分の間身を寄せることにしていたが、郡山市役所の指示もあつて一番上の姉の家に入り、

やつと人並みに落ち着いた日々を送れるようになった。

だが一難去つてまた一難という言葉の通り、日本語をほとんど忘れていた私には、言葉を覚えると言う難行があつた。日本に帰つてまで周囲の人たちから馬鹿にされ、侮辱されるとは思いも寄らないことだった。

しかも、諸般の事情により私は日本国籍を失い、無国籍者となつてしまった。進退窮まった私は、当時福島県の引揚者団体連合会の会長をしていた滝田さんに相談し、力になつてもらい、三年以上もかかつてやつと、念願の日本国籍を回復した。

やつとの思いで国籍は回復したものの、言葉の障害は相変わらずで、まともな仕事に就くことは難しく、苦しい生活が続いた。そんなころに滝田さんのお世話で、同じような境遇にあつた渡辺芳子と結婚し、何とか曲がりなりにも一家を構え、故郷での生活再建を開始した。中国時代に習い覚えた大工仕事を、生活の糧とすることにした。

二 妻、芳子の労苦

芳子は、父渡辺僭忠と母げんの間に五男三女の次女として、郡山市で生まれた。父は市内で働いていたが、何の仕事をしていたのかは記憶にないとのことだが、ただ貧乏子沢山の家で大変苦勞していたことだけは、幼い子供心にもはっきりと覚えていたとのことだ。

特に父僭忠は酒癖が悪く、常に酒を飲んで大声を出して怒鳴りわめき散らし、母は幼い子供を両腕の中に抱え込んで震えていた。恐ろしくも悲しい家の中の様子は、今も脳裏に焼き付いているそう。

生活は当時から見ても最低の生活で満足に食べることもできず、常にひもじい思いであった。そんな生活環境の中で、弟の忠男は四歳の春に、その下の信義は一歳になったばかりの時に、栄養失調から病氣にかかり死んでしまった。そのような生活の中で生きていた。

当時は大東亜戦争もだんだんと激しくなり、郡

山市にも多くの軍事工場や軍施設ができ、人口が急増してきた。市当局としては、戦時体制の下での都市計画の進展と産業再建により住民整理を行い、住民たちを当時国策として強く叫ばれていた満蒙開拓のために、開拓団として送り出す計画を推進していた。

昭和十八年には第十二次移民団の編成が行われ、満州国三江省依蘭県西阿地区の郡山分郷開拓団が送り出されることになり、父も嫌々ながら周囲の人たちの説得と甘い話にまんまと乗せられて、一家八人を引き連れて十八年の春に満州へ向かって旅立った。

郡山市内で大道商人を営み、大親方と言われた芳原幸一さんを団長とした数十人の人たちと、賑やかに西阿地区に入植したが、途中で郡山市周辺とはその規模も景色も全く異なる満州の広大さ、美しさに一種の感動を覚えながら北上し、佳木斯に至りそこから大きな船に乗った。中央にはガラガラと音を立てる水車があつて、それで水を掻き

ながら進む船に乗り、海のように広い松花江を遡上した。

美しい姿をした小高い山や、景色の良い崖岸、そして見渡す限りの平原。夕方になると大きな赤い夕陽が沈む地平線など、今まで見たこともない美しさに、満州へきた実感をしみじみと味わいながら西阿へ入った。

郡山分郷開拓団では、前年に建設された第二部落に入ったが、そこは一棟二軒の長屋が十棟あった。どこにだれが入ったかは、子供であった芳子にはよく分からなかった。屋根は草で葺いてあり、壁は土で固められた土色をした建物で、今まで見たこともない形の家だった。夜になるとランプが唯一の明かりで、珍しいというよりも寂しさの方が強く感じられて、暗く恐ろしい気持ちだった。遠くから狼の鳴き声が聞こえていた。

郡山では会ったこともない人たちばかりで、打ちとけて話し合うこともあまりなく、食事も変わっていきまなく食欲もなくなった。この状態は芳

子の家ばかりのことではなく、どの家でもみんな同じようだったが、どんなに嫌でも子供にはどうしようもなく、辛抱するしかなかった。

そんな毎日をごしているうちに学校が始まり通学したが、学校とは名ばかりで、やはり土造りの部屋に全学年が入り、先生は一人しかいないので、みんな思い思いのことをしていた。

だが天気の良い日に外に出ると、広く高く真つ青な空と見渡す限り果てしない平原で、気分がのびのびしてきた。春になると一斉に花が咲き、ひばりなどの小鳥がさえずり回っていた。周辺の畑や草原の緑も日に日に増してきて、やっと人心地がつくようになった。

畑の農作物はよくできたが水田が見当たらず、お米だけのご飯が食べたくても食べられない不満もあった。家で雇った満州人の農夫とは言葉が通じなかったので、親近感も湧いてこなかった。それでも何とか平和な一年が過ぎて昭和二十年を迎えたが、春になると団内の男性はほとんどが召集

されていなくなっていた。

不安な毎日を通じてうちに八月になると、ソ連軍が不意に国境を破って侵入してきたという話が伝わってきた。父と一番上の兄も召集され、どこに入隊したか分からなかったので、頼りになる人もなく、不安は募っていた。

そのうちに団本部から避難命令が伝えられ、慌てて準備をして家を出た。西阿を出るとすぐに、松花江に架かっていた大きな橋が、ソ連軍の爆撃で途中からへし折られてしまった。最初の予定ではその橋を渡って南下することになっていたのに、恐怖心は一層募り、致し方なく別の橋へ向かい、その夜はその橋の下で野宿した。夜中になると付近の農民が襲ってきて、わずかに持っていた荷物を、片っ端から略奪していった。絶望と恐怖のどん底に突き落とされてしまった。

もうこのような状況になったら汽車や船で南下することは考えられず、ただ歩く他に手段はなくなった。道路を歩くことは恐ろしいので、道のな

い草原や山の中を既に通った足跡を頼りに、歩くことになった。出発するときに履いていた靴は、たちまちに破れて履けなくなり、裸足になって山道を歩くと足裏は破れて血が吹き出し、激しい痛みで泣きながら歩き続けたが、みんなと離れるとそれこそ置き去りになるので、必死になって歩いた。遅れると走って追いついたが、離れるということは死を意味していた。

天気が良いときばかりならばまだ少しは良いが、雨が降ると流れる雨水で地面は泥々になり、それはそれはひどい姿になった。まさにこの世の地獄だった。

そんな逃避行中に、次兄の富次の死という事態に直面した。兄富次は生まれつき足が悪く、普通の人でさえ歩行困難な道だったので、人について歩くことができず、歩きながら泣き叫んでいたが、途中で一緒になった日本兵に頼み込んで銃殺してもらった。十六歳だった。そのときに芳原団長の母親も同じ運命となり、みんな泣く泣く見送り

をした。芳原団長の母親は七十三歳だった。

絶体絶命の死の行進だった。河を渡る時は橋も船もないので、大人は裸になって胸まで浸かりながら渡り、子供は一緒にいた兵隊が両岸にロープを張り、それにつかまって命懸けで渡ったが、川の途中で疲れてロープから手を少しでも離すと流されてしまうが、だれもそれを助けることができなかったのも、流された人はほとんど死んでしまった。

やっと河を渡り終え再び歩き続けたが、山道へ入ると、先に行った一団から取り残された人たちが、ただ黙ったまま私たちを見ていた。いずれこの人たちには、ここで餓死するか、病死するかの運命が待ち受けていた。芳子もいつそのようになるか、遅かれ早かれ同じ運命が待っているだろうと思っていた。

何を食べ何を飲んで歩き続けたか、今になっては分からないが、毎日毎日歩き続けて、見ず知らずの開拓団の部落にたどり着いた。あとになって

知ったが、そこは方正県の開拓団だった。多分九月の初旬ではなかったかと思う。これ以上歩く力もなく、希望もだんだんと失っていったので、そこで越冬することに決め、団内の壊れかかった宿舎に分散して入った。だがその宿舎も既に荒れ放題になっていたので、家の中に穴を掘ってそこに枯草を敷き詰めて寝起きができるようにした。しかし寒気は容赦なく襲ってきた。住の方が何とかなると、次は食えることだった。近くの満州人部落へ行っても払うお金がないので、後生大事に持っていた毛布と高粱とを交換したりしていたが、いつまで続くものではなかった。団長が、少しずつ工面して手に入れたものを配ってくれたが、それこそ焼け石に水であった。

寒さが増すに従って死んでいく人が次々と出てきたが、その遺体処理するにも地面が凍りついて穴も掘れず、一カ所に山のように積み上げるだけだった。そのうちに、風雪にさらされた遺体は白骨化してきた。厳寒の冬空に吹きすさぶ寒風の

音が、まるで死者の悲しい声や恨みの泣き声のように聞こえた。この周辺に住んでいる満州人の人々たちにも、その恐ろしさが伝わり、眠ることができなかったと言っていた。

後年のことだが、中国政府は麻山や虎林などにあった白骨化した遺体を、ここ方正飛行場跡に集めて埋葬し、中国国内で唯一の日本人公墓を建てたと聞いた。

弟の幸男も九歳という幼い命をここで亡くし、それまで団員のために一生懸命に尽くされた芳原団長も亡くなり、多くの人々たちも亡くなった。このままでは芳子たち家族にも、早晚死が訪れることは分かっていたし覚悟もしていたが、まだ二十歳にもならない上の姉八重子が満州人の家に行き、芳子たち家族を救ってくれることとなった。芳子たちも一緒にその家に行ったが、家は狭くて貧しい生活をしていたので、食べ物もあまり豊かでなく、収容所生活とあまり変わらなかった。

母はその家で四十五歳の生涯を閉じ、続いて翌

年の一月には妹勝子も四歳という短い人生を終えた。日本へ帰ってから知ったことだが、勝子の死んだ前後に、父もシベリアで過酷な労働の結果、栄養失調で亡くなっていた。結局家族は姉と芳子の二人だけになってしまったが、苦勞をしながらも何とか死ぬことなく生き延びていた。

芳子は十五歳になったときに原因不明の病氣になったが、その家の叔父さんという人に連れられて、土地も家もある農家に預けられた。その家では親切にしてもらい、不自由なことも少なく過ごし療養に努めた。十七歳になるのを待って、その家の長男と結婚させられた。二十歳のときに男の子を出産し、その後は子宝に恵まれなかったが、十八年過ぎて女の子を産んだ。

姉の八重子は、十年一緒に暮らした夫と死別したが、子供がなかったもので、その後二十歳も年上の人と再婚したが、これも貧乏農家だった。しかし子供が四人次々と産まれ生活が苦しくなり、その疲労から心臓病を患うようになった。その間の

労苦は大変なもので、言葉で言い尽くせるものではなかった。

昭和五十年を迎え、日中国交回復となり日本への一時帰国が認められるようになった。そのころには芳子の夫も亡くなり、再婚した姉の夫もなくなっていたので、同じ部落の仲間の橋本さんの手続きによって、日本へ帰ることになった。芳子は八歳になったばかりの娘を伴い、姉と三人で三十二年ぶりに日本の土を踏んだ。

空港では昭和二十二年にシベリアから復員した兄の迎えを受け、涙、涙、涙の再会を果たし、そのまま兄に連れられて郡山へ向かった。復員後、開拓農業をしていた兄は、広い田畑を持ち立派な家建て幸福な生活をしていたので、芳子たちもここで当分世話になれると思い安心した。

だが実際は反対で、大変なことであった。兄は父に似て酒癖が悪く、家の中は火の車だった。だが兄嫁は心優しい人で、芳子たちを気持ちよく温かく迎え、受け入れてくれた。姉はすぐに入院し、

心臓手術を受け人工心臓を入れた。芳子はどうしようかと兄に相談すると、すぐに酒が入り怒鳴り散らすので話にならず、娘と寒い外に出て夜を明かしたこともあった。これでは再び中国に帰るしか道はないと思っていたときに、滝田会長から再婚の話が持ち込まれたが、芳子にはなかなか決心がでなかった。

大玉村では事情を知って、引揚者住宅を提供し生活保護も受けられるように手配して頂き、多少なりとも人並みの生活はできるようになった。姉は手術の結果が少し良くなると、家族恋しさに中国へ戻ると言い出したが、医者は再手術のこともあるので、今戻るとは無理だと言った。そんなこんなで芳子の心も乱れ、涙の止まらない日々を過ごした。だが、少しでも良い方へ向かわなければと考え直して、芳子は再婚することを決心した。再婚の相手は中国残留帰国者で、芳子と同じ境遇にある、同じ村出身の加藤清（私）だった。清は郡山の工務店で大工の見習いをしていたので、

成子を連れて郡山市内でさやかな家を持つことになった。やっと芳子にも中国残留者としての生活から足を洗い、市民の一人として新しい生活を迎えることができた。

三 その後の私たちの生活

昭和五十六年に郡山市の市営住宅へ入ることができ、その後中国に残っていた芳子の一人息子一家も呼び寄せ、生活もどうにかできるようになった。五歳で奉天の満州人に預けた末弟の辰男も、肉親探しの訪問団の一員として来日し、テレビ放送で「父が馬車の事故で死んだ！」という話をしたこと、涙の再会を果たした。その後どうしても日本で生活したいという願いから、一家を引き連れて永久帰国をした。

私の父母は、中国で悲惨な状況の中で無念の死を遂げたが、姉弟は曲がりなりにもみんな元気で戻ってきたことは、不幸中の幸いであつたと、感謝の気持ちでいっぱいである。それに引き換え妻の芳子は、同じような運命に翻弄されたが、渡満

した一家八人は結局一人だけになつてしまった。運命というものの恐ろしさを、つくづくと感じている今日である。

両方の父母の骨を、あの荒野のいずことも知れぬ場所に残したまま、私たちは故郷に戻り一応平和な日々を過ごしているということは、まったく申し訳ないことである。